

歩行空間の景観構成要素と心理評価構造 の定量化に関する研究

法政大学 ○ 中戸宏幸 長野澄子
 法政大学 正 渡部與四郎 宮下清栄
 住・都公団 高橋賢一

1. 研究の目的

わが国は高度経済成長期において急激な都市化に対応するため、公共投資によって社会資本の中で特に道路などの整備に追われてきた結果、画一化された個性のない都市を創り出してしまった。また、近年国民の生活環境の向上を要求する気運が高まりつつある中、まちづくりにおいてアメニティの面から捉えることは必要となってきた。そこで、第一歩としてアメニティの重要な要素である都市景観について考察する。市民参加型のまちづくりを目指して、武蔵野市を研究対象地域に選定し、景観構成要素と心理量との関係を定量的に把握し、今後の景観整備の方向性・指針また景観整備後の効果を知る上で重要な基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

研究の方法をフローチャートに示したのが図-1である。市民参加による街づくりを行うため評価実験には、武蔵野市民148名を対象とした。景観提示にはスライドを用いた。スライドは武蔵野市の街路の中から9景、既存の東京周辺の代表的商業地景観8景、イラスト2景、画像処理により景観を変換したものを13景、計32景を用い、景観整備の方向性を探る調査と、構成要素と心理量の相関をもとめるアンケートを実施した。景観の修正は図-2に示す項目について行い、修正は計算機により行った。評価方法は、SD法(7段階評定尺度)を用いて16形容詞対を選定し評価を行った。

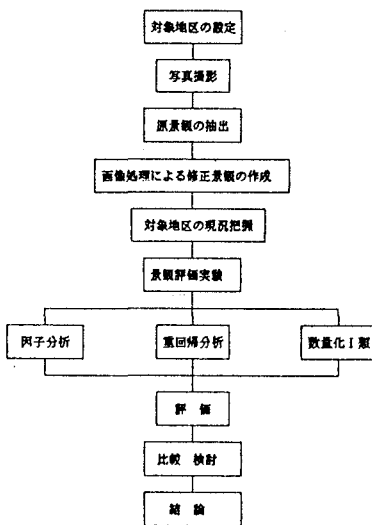


図-1 研究のフローチャート

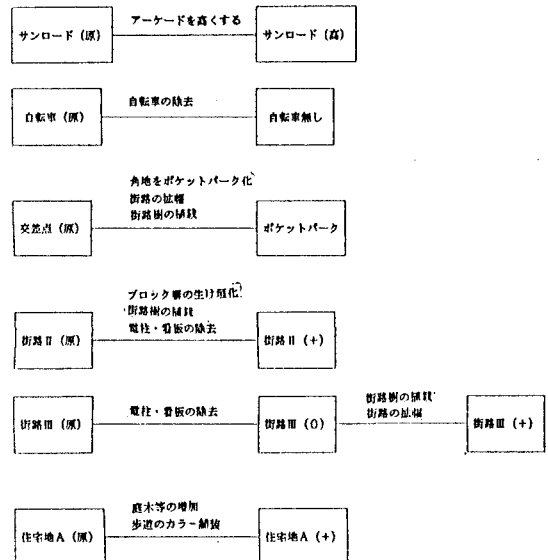


図-2 画像の修景

3. 分析と結果

整備の方向性を分析するため、得られたデータをもとに各街路景観毎のプロフィール分析を行い、各街路の特徴を把握した。次に因子分析(バリマックス法)により、各尺度の因子負荷量及び因子寄与率を求めた。

4. 考察

5. 今後の課題

なお、本研究は日本都市計画学会武蔵野市都市景観調査委員会によるデータを利用させて頂いた。本研究にあたり、終始丁寧なる御指導を頂きました委員の先生方に深く感謝致します。

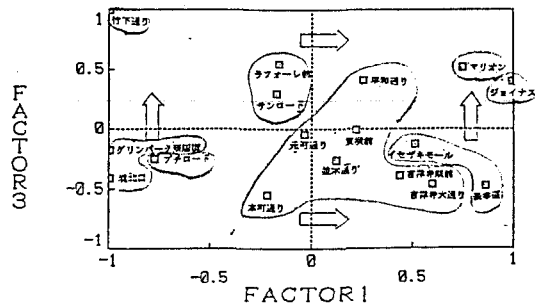
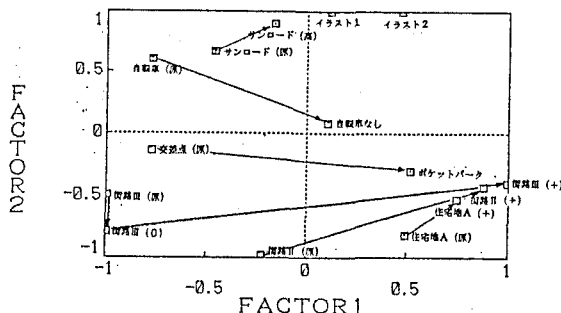


図-4 因子得点のプロット図 (F1-F3)



— 277 —